

シカゴ社会学の鍵概念（その2）

——トーマスとトーマス

後 藤 将 之

1 社会学者としてのドロシー・トーマス

ドロシー・スウェイン・トーマス (Dorothy Swaine Thomas, 1899-1977) は、ジョン・ナイト・トーマスとサラ・エリザベス・スウェイン・トーマスの一人娘としてメリーランド州ボルチモアに生まれ、1935年、1926年以來の共同者だった社会学者 W・I・トーマス (William Isaac Thomas, 再婚時 72 歳) と結婚した。独身時と結婚後のラストネームが、どちらもトーマスだった人である。小論では、W・I との区別を容易にするため、基本的にドロシー (・トーマス) と表記する。

ドロシー・トーマスは、いわゆるシカゴ学派の社会学者ではない (そもそも社会学者だけでもない)。コロンビア大学バーナード・カレッジにて社会学者 W・F・オグバーンに指導を受け共著で 2 本の学術論文を发表、学位を得た (1922) のち英国に留学し、ロンドン大学経済校 (LSE) に 2 年度 (1922-1924) 在学して、24 歳で経済学の Ph.D. を取得した。学位論文は翌年英国で出版された (Thomas, 1925)。オグバーンのはちシカゴ大学社会学部に移り、計量的な社会学者として知られるが、コロンビア大で学位と教職を得ていた。

以下に示すように、ドロシーは社会学者というに尽きない多才な社会科学者だった。また、W・I の、当初は共同研究者、後に配偶者、さらに遺稿管理人として、シカゴ社会学の動向に大きく影響した人物でもある。1930 年代初めにドロシーが 2 人の協力者と住んだイェール大学の家には、当時まだ彼女と結婚していない W・I を含め、著名な社会科学者の来訪が絶えなかったという¹⁾。

しばしば社会学の「シカゴ学派」は、特定の場所の大学や建物と排他

的に結びつけて論じられるが、それは必ずしも適切ではない。その学派の創始者のひとり W・I 自身が、はからずも複数の場所で研究を続け、別系統の背景をもつ共同者との影響関係の中で作業したからである²⁾。ドロシー・トーマスは、1926 年から 1947 年の W・I 逝去時まで、20 年以上、W・I の共同者だった。

ドロシー・トーマスは多くの肩書きで呼ばれている。少なくとも統計学者、人口学者、社会学者であり、最後の肩書きでは、アメリカ社会学会の（女性としては最初の）第 42 代会長となっている（1952）。その会長演説は「学際研究での諸経験」の題目で公表されている（Thomas, 1952）。

小論では、ドロシー・トーマスの多彩な研究活動のうち、社会学における 3 種類の代表的な貢献を短く紹介検討し、全体的な特徴を論じる。それらは、(1) W・I との共著『アメリカの子供』(Thomas and Thomas, 1928) におけるドロシーの役割、(2) ドロシーを中心とした子供の行動研究 (Thomas and Associates, 1929; Thomas and others, 1933)、(3) 日系アメリカ人の強制収容を調査した研究 (Thomas and Nishimoto with others, 1946; Thomas with Kikuchi and Sakoda, 1952) である。ドロシーには他にも、ノーベル賞経済学者サイモン・クズネッツとの共著や、W・I と共に参加したスウェーデンでのミュルダール夫妻との共同研究（スウェーデン版『ポーランド農民』となる計画だったが完成されず、成果の一部はドロシーの単著 (Thomas, 1941) として公表された）などがあるが、小論では以上の側面に限って検討し、シカゴ社会学のあまり注目されない鍵概念「調査計画 research plan」について要約的に検討したい。

2 『不適応の少女』から『アメリカの子供』へ

トーマスとトーマスの共著『アメリカの子供』は、「トーマスの公理 Thomas Axiom」の定型表現が出現する (p.572) 文献として著名である。だが同書は、両名の研究の必然から成立した共著でもある。

W・I は、1920 年代までに、未開社会研究、性研究、ポーランド移民研究などを行っていた。ポーランド移民の研究で欧・米の人種関係を熟知した W・I は、アメリカの黒人と白人の関係を知悉していた知人の口

バート・E・パークをシカゴ大学に呼んだことで、シカゴを人種問題研究の中心地にした³⁾。1918年の過大なスキャンダル報道以後、永続的な大学の地位を離れたW・Iは、1920年代に2冊の少年非行の研究書を刊行した。1923年の単著『不適応の少女』と、1928年の共著『アメリカの子供』である。これらの検討から、2著作を結びつけるW・Iとドロシー双方の研究展開が見える。

2-1 『不適応の少女』

W・Iのその他の大冊と比べて『不適応の少女——行動分析のための事例と視点』は短い著作であり、E・S・ダマーの「まえがき」を除く本文と索引の合計は261頁である⁴⁾。本書でも93件の事例・実例の要約（本文から明瞭に区別できる形式で事例番号付きで引用）を本文中に提示しつつ、議論が進められる。事例は当時のシカゴ市の非行や不適応の記述が多く、短いもので10行程度、長いものは5頁前後（ある事例は20頁以上）である。興味深いのが、これらの引用文はW・I独自の思考、概念、文体を代表していない。

W・I独自の思考の枠組を明瞭化するため、事例93件をすべて省略し、数頁にわたる別著者の研究の引用（数か所）も省略して、「W・I自身による本文」全体のコーパスを作成した⁵⁾。W・Iの研究作業の実態については記録がある。「W・I・トーマスは熱心なノート記録家で、およそ4インチ×6インチ大の紙片に記録していた……。書物やモノグラフから逐語的に取られたノートはある色の紙片に、トーマス自身のコメントは別色の紙片に、そして参考文献は第3の色の紙片に、だった。彼は明らかにこれらの紙片を非常に大量に集めており、それが彼の講義と著作の基礎になった」（Janowitz, 1966, p.xx）。以下の筆者の要約は、上記3種類の紙片から作られたはずの本書から事例と文献の紙片を省略し、W・I自身の論述、その論理体系だけを残そうとした試みだろう。

第1章「願望」（1～40頁、本文約3900語、事例は1～24番の24件）人間行動を促す諸力である「願望 wishes」の研究によって行動の問題にアプローチできるとし、人間の願望は4つの一般的な類型化が可能だとする。4つとは、「新経験への欲望」、「安全への欲望」、「反応への欲望」、「認知への欲望」であり、事例の検討から、これら「4つの願望」

が、各事例でいかに作用しているかを論じている⁶⁾。性格とは、気質と経験から結果した、願望の組織化の表現だと定義される。本章は「4つの願望」の紹介と適用である。

第2章「願望の制御」（41～69頁、本文約2800語、事例は25～36番の12件）自己決定的な行為に先行して、状況の定義と呼ばれる検討と熟慮の段階がある。具体的な行為だけでなく、人生の方針全体や個人の人格そのものが、継続した定義に依存している。子供が集団内に生まれた時、一般的な状況はすでに定義され、対応する行動規則も発達しているので、自分で定義をして自分の願望に従える機会はほぼない。個人による自発的な状況の定義と、社会が与える定義とは常に拮抗している。継続した状況の定義から構成された道德規律や行動規範が、願望の表出を制約する。道德とは一般的に受容された状況の定義のことである。それは世論や不文律、形式的な法規制、宗教的な戒律や禁忌に現れる。

社会の最小単位である家族は、第一次的定義エージェンシー *primary defining agency* である。コミュニティーも定義エージェンシーだったが、かつてほど行動の制御力を持たない。それはコミュニティーの一般意思へと、頑固な個人を同調させていた。コミュニティーが使ういっそう形式的ではないが非力でもない状況の定義の手段はゴシップである。それは悪口だが、組織する力でもある。集団は、望ましい態度を構成員に生み出すために恐怖心を用いる。慣習と感情は全てが家族とコミュニティーの産物なので、それらによる否認や分離は耐え難くなる。その影響で発達した習慣と反応は、機械的な適応と同じほど決定的になる。

本章は、各種の集団が非同調者に用いる組織力・行動規範としての「状況の定義」の諸相を、事例から説明している。「願望」の語も使われるが、その4種類が「状況の定義」との関連で検討されてはいない。

第3章「行動の個人化」（70～97頁、本文2000語、事例は37～54番の18件）本章には「状況の定義」系の表現 (*redefining of the situation, definition of the situation, defining agency, defined* 等) が15回出現するが、「願望 *wishes*」は6回であり、「欲望 *desire (s)*」は出現せず、「4つの願望」の形では論じられない。やはり *W・I* の概念である「(社会) 解体 (*social disorganization*)」が72頁に2回出現する。

本章も2章と同様、「状況の定義」に大きく依存した議論である。

要約すれば、新発見、偶然の知識、新環境によって状況が再定義され、個人や全体社会に、変化つまり解体または別タイプへの組織化がもたらされる。状況の定義エージェンシーとして、法体系と、映画・新聞・雑誌などが挙げられる。状況の定義は、曖昧なものの決定と等価である。再び曖昧になる状況や、決して定義されなかった状況もある。ただしロシアのミールや50年前のアメリカ農村では全てが定義されていた。かつては個人の富は家族やコミュニティーの富と結びついていた。個人主義とは生活を私的に配列することであり、自分自身の状況の定義と行動規範を決定することである。ある事例では、生活は結婚に限定されていたが、別の事例では、結婚は、私的な願望充足と責任回避のための道具としてのみ定義されていた。共同体の既存の状況の定義が決定していた個人行動が解体し、個人化していることが論じられる。

第4章「女子の非行」（98～150頁、本文約3100語、事例は55番～82番の28件）本章は、本書の主題（女子の非行）を、事例と別著者による社会統計に依拠して中心的に検討している。用例としては、「状況の定義」が1回だけ冒頭部に出現する。3回出現する「状況」も、残り2例は一般的な使用で、define系の語は他には出現しない。

W・Iは約3000の事例を検討したと記され（p.109）、印象深い事例の記述も多い。本論のひとつの基本的な立場は、不適応少女において「セックスはその他の願望の実現手段として使われる。それは彼女たちの資本である」（p.109）という、当時としては新しい端的な視点だろう。他方、客観的な統計数値は犯罪社会学者キャサリン・B・デーヴィス Katharine B. Davis の調査結果などに多く依拠する（116頁以降。ニューヨーク州女子更生所での647名のライフ・ヒストリーからの統計値。デーヴィスはシカゴ大でW・Iの学生だった社会学者）。

本章はある意味で本書の中核部分であり、具体的な「不適応の少女」の実例が理論枠に従って分析される箇所のはずだが、著者が検討したという3000事例中の28例が提示される（本書全体でも93例）のみで、マクロな統計数値は、教え子とはいえ別著者の研究に依存する。また、先行の章で導入された「4つの願望」、「状況の定義」、「解体」、「個人化」などの概念が適宜援用されるが、これらの概念ツールによる検討は、

個々の事例の分析ではあまり明示的に記述されない。W・Iにとって、これらの事例を独自の概念群で検討する作業は実施済みだったかのようだが、その具体的なプロセスが期待されるほど説明的に提示されない。本書の基本的な問題はこの説明方式にある。

第5章「社会的エージェンシー」(151～221頁、本文約4400語、事例は83～90の8件)本章は、家族との関係で少年非行を検討し、それを修正するための社会的機関(エージェンシー)を論じる。健全な家族には悪い個人がないというのは概して事実である。よく組織された家族には資産と地位があり、構成員の願望を統制し充足させる。健全な家庭の少年には窃盗の機会がなく、少女には売春の機会がない。そこで、道徳崩壊の傾向を示す家族構成員に対しては、少年少女がその一部である全状況 whole situation を救済すべく、家族を強化しようとする。事例を通して、崩壊家族をリハビリするための社会的エージェンシーの課題が例示される。不適応少女の願望の社会的組織化を保証するに充分なだけの人格形成的 formative な影響の欠如が問題として指摘される。

少年裁判所と類似の手法を用いて、親やコミュニティーのようにふるまう少女保護局 Girls' Protective Bureau の活動が事例により検討され、しばしば結果は良好だとされる。ただし、即興的な家族やコミュニティーでは、難しい少女に新たな生活シエマ(脳裏での図式化)を与えるには充分ではないとも指摘される。しばらくは新しい安全を喜ぶが、新経験・認知・反応の欲望が戻ってきて脱走する。なんらかの影響、とりわけ別パーソナリティーからの効果によって、非行少女への状況が定義され、改心をもたらし、自発的に生活が再組織化されることもあるが、全面的に解体した少女の生活の場合、この変容は、2つの新経験期間の間の安全な位相という以上ではなく、ソーシャルワーカーはその持続期間の見積を習得せねばならない。事例中では、医師自身すら永続的な人格変化が生じるとは期待していない。

本章は事例の検討によって、状況の定義の弱まった家族における、4つの願望の不均衡な発露としての少年非行の問題を検討しており、W・Iの概念群が組み合わせられて適用される。ただし、W・Iの諸概念は、「シンプルな日常語句に広範な意味を持たせた専門用語」であるため、文中に自然に溶け込むジャーゴン(意味の分かりにくい専門用語)的で

ない表現としては記述全体を読みやすくするが、反面「ある語が当該の意味での概念なのか」の判定がやや難しい。

なお、前出「全状況 whole situation」の語は、続く『アメリカの子供』における「全体状況 total situation」の先駆にみえる。212 頁にはスティグマ stigma の語が特に説明なく 1 回出現する。少年裁判所への出頭が子供に課せられたスティグマとなり、将来の好ましい認知の可能性を奪うとする。

第 6 章「社会的影響の測定」（222 ～ 257 頁、本文約 7400 語、事例は 91 ～ 93 の 3 件）結論である本章は、自然科学に比しての社会科学の未発達を指摘し、自身の諸概念の適用で問題の定位を試み、今後の課題を提示している。

非行少女を更生させる最高の努力も、生活の好ましいシェーマ化ができるように子供の行動をコントロールする努力も、きわめて不完全である。少年刑務所も実験学校もその望みを実現できていない。行動科学の発達の主な障害になるのは、我々がすでに適切な体系をもっていて、それを成功裏に適用すれば、個人の願望を、家族・コミュニティー・教会の影響によって、慣習的常識的な意味で制御できる、とする我々の信念である。社会の枠組み全体が本質的に安定だとの仮定に依拠するコントロールの古い形式は、この仮定が現実である限り現実だが、もはや事実ではない⁷⁾。社会的世界での不協和は、実は機械的世界の進歩率の不均衡による。科学に依拠する物質的世界の進化が急速であり、常識に基づく社会的世界を解体させている。社会科学の進歩が遅いもう一つの理由は、古いコミュニティー基準つまり「規範」への我々の感情的執着である。日常習慣の形成には多くの情動が関係し、人は常に変化に反対する。このことが社会改革などの探求を制御している。進行中の社会進化の中では、行為だけでなくそれを制御する規範も変化している。伝統・慣習・状況の定義・道徳性・宗教も進化しており、特定規範が健全で、それと不一致のものは全て異常だと仮定する社会は、その規範が社会的意義を喪失し、代わりに別規範が出現したと知るや、何もできなくなる。

50 年前には大雑把に 2 タイプの女性が区別されていた。完全に善良な旧式の女子と、まったく悪い有罪で非合法の女子である。現在ではいくつかの中間形態がある。時折の売春者 occasional prostitute、乱脈な

女子 charity girl [性的に無差別的な者]、半処女 demi-virgin [触発的にはふるまうが性交には至らない者]、二面的なフラッパー equivocal flapper、どんな仕事にも適応する新しいが社会的な規範をもつ女子である。これらの誰ひとり、正常であれ異常であれ、祖母の行動規範に同調していない。全員が、変動する社会条件下で自身の願望を実現する同一の運動を代表している。この運動には解体と再構成が含まれるが、どちらも同じ運動であり、過去の規範下では表出できなかった重要な社会的エネルギーの解放である。社会基準から隔たったどんな一般的な運動も、その基準がもはや有効ではないことを含意する。

成功する研究法は、個人と規範の両者を進化するプロセスとして含むだけ広範かつ客観的であり、偏見も憤りもなく事例を比較する。あらゆる新運動は、新条件に応答した別タイプの組織に先行する不調和と、一定のランダムな探索的運動を意味する。個人生活のどの一部も、生活の全体から分離して研究されてはならないし、異常を正常から分離してもならない。異常集団は、我々がノーマルと呼ぶその他の集団との比較で研究されねばならない。実生活では正常と異常は連続していて、対応する正確な事例が選択できるし、比較によってのみ正常と異常の本質が理解できる。因果関係が十分に決定できたなら、昇華されて社会的に有効化されない個人のエネルギー・不安定・願望タイプはおそらくない。この見地から問題なのは、混乱した反社会的個人から自分たちを防衛する社会の権利ではなく、秩序化され社会的に有効化してもらう混乱した反社会的個人の権利である。とはいえ具体的なアプローチ法の欠如は重要な問題である。行動問題へのアプローチ法は個人の願望の研究にあり、認知・反応・安全・新経験を与える社会が、これらの願望を社会的に望ましい方式で限定し、発達させる力の見地から、その社会の条件を研究することにある。

社会には組織された影響源・社会組織・社会的エージェンシーがあり、家族・学校・コミュニティー・矯正所・刑務所・新聞・映画などを含む。これらが大衆の影響源であり、研究と変化の対象となっているが、個人の私的な進化のさらに完全な記録も必要である。最終的に個人の生は、社会的影響全体の測度であり、制度は個人のパーソナリティ発達との関連で研究されるべきである。社会的影響を測定するひとつの手段が「パーソナル・ドキュメント」であり、生をひとつの結びつけられた全

体として提示し、影響のやりとりを示し、態度への価値の作用を示す。

以上、本章でも、W・Iの概念群が適用され、少年非行の社会的影響源の測定を指向する理論的検討が、事例を参照する形式で、ある程度展開される。状況の定義、価値と態度、4つの願望、解体など多くの概念を有機的に関連させた議論が行われ、価値相対論的なフラットな基本論調の中で、社会の価値と個人の願望との調和や進歩を指向する建設的な分析が示される。すでに指摘されてきたことだが、W・Iの行論には、時代的な限界から近年は差別的とされるような用語も使われる。本書の主題自体、性別を限定している（本書が先行する女性研究からの展開であり、事例には男性も現れるにしても）。とはいえ、その洞察や認識範囲や指向性自体は、1923年の著作としては意外に「現代的」であり、W・Iの研究の価値が評価される部分だろう。

なお本章でも、個別の事例への論及が全体に弱い印象がある。「パーソナル・ドキュメントにきわめて密接に依拠したため、トーマスには……逸脱の事例と非逸脱の事例の比較という、自身の方法論の主要な関与を行う機会がほとんどなかった」（Parenti, 1967, p.xx）。また、上述のごとき大胆な論述には多くの実証的な根拠の提示が明証的に必須であり、行論の随所で事例を参照する論法が必要に思えるが、その立論方式は期待されるほど多くない。現代の基準では、データとそれに依拠した論述や一般化の関係がやや不明瞭に感じられる。『ポーランド農民』は、その主題から、それ自体が大規模な事例研究報告としても通用する。これに対して、アメリカの不適応少女や少年非行の全般を主題とした場合、いっそう形式的な方向が求められるといえよう。

2-2 『アメリカの子供』

以上のような構造と内実をもつ『不適応の少女』であるが、これを完成させた後の作業はどのように構想されただろうか。当該書では、不適応少女の実態と対応課題については一定の詳細な事例研究が行われた。とりわけ、不適応者の心理とそれととりまく状況を入念に分析することで、全状況の中で生み出される少年非行とそれへの対策について、相対論的でありながら建設的な提言がなされている。この部分が、それ以前の非行研究に比較した本書でのトーマスの「状況」分析の達成だろう。しかし、それに対処する社会制度のより具体的な検討と、事例研究では

ない形式的なデータに依拠した少年非行や逸脱の分析は手薄な状態だった。本来 W・I の研究目的は人間行動全般の理解にあり、「不適応」や「非行」の個人行動がいつそう扱いやすいと仮定されたための不適応少女の研究だった (*Ibid.*, p.1)。

ここから、新展開には2つの可能性が挙げられよう。第1に、少年非行に対処する各種の社会制度をさらに詳細に検討すること、つまり1923年段階では第5章で要約的に示された社会的エージェンシーの実態をより詳細に記述し、その矯正プログラムや研究計画を検討すること。第2に、さらに社会統計的なデータを導入して、具体的な「状況」分析に尽きない記述をも充実させること⁸⁾。これらの意図のもとに拡充された研究成果が大著『アメリカの子供』だと推測される。この文脈で、W・Iの共同研究者として、もう一人のトーマスが現れる。両トーマスの共同は、ごく大局的には、「状況」分析のW・Iと統計分析のドロシーとの相補的な作業と特徴づけられている。

学位論文を完成させた後、ドロシーはアメリカの主要大学にポストを得られず、1年間、連邦準備銀行(FRB)の経済統計家として働く。1925年、自分の調査計画に研究基金を得、ニューヨークの犯罪の判決例を調査しようとしたが、データが入手できなかった。ドロシーの重要な影響源だった経済学者ウェスリー・C・ミッチェル Wesley C. Mitchell が、W・Iに相談することを示唆した。ミッチェルはシカゴの経済学者ソースタイン・ヴェブレンの弟子として知られ、ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ創設者の一人だった。そしてW・Iは、この時期ニュー・スクールで教えていた。W・Iは子供の発達研究プロジェクトに統計家を探していた。前著での不足を改善しようとしたと推測される。ドロシーは喜んでW・Iの計画に参加した。

『アメリカの子供——行動の問題と計画』は、本文と短い付録を合わせて583頁の大冊であり、不適応の子供の実態と対応と調査に関する3部13章からなる。第1部「不適応の諸相」(第1章1～94頁)、第2部「実際の計画」(第2～7章、95～329頁)、第3部「調査計画」(第8～13章、330～575頁)から構成される(本書についてもコーパスを作成中だが、校訂の途中であり、また以下述べる理由からも小論では利用しない)。

この575頁中、明瞭に子供の事例研究なのは第1章(第1部と同題)

の94頁だけである。この部分は、前著と同じく1から46の番号を付した事例を引用しつつ、子供の不適応の諸相を集中的に記述している。

第2部は少年非行への対応措置を論じ、第2章「非行への処置」、3章「精神医学的な子供指導クリニック」、4章「コミュニティー組織」、5章「学校での適応不良への処置」、6章「学校における人格教育」、7章「親の教育」からなる。両トーマス名義の短い本書の「まえがき」には、本書の一部は「重要な、あるいは典型的な計画が実施されているアメリカとカナダの都市と施設への訪問」に依拠したと記されている。この第2部は、これら各所での少年問題への対応と結果を、施設の記録を引用する形で紹介・検討した制度の実態紹介と比較検討が中心である。

第3部は少年非行の調査アプローチにかかわり、第8章「サイコメトリックのアプローチ」、9章「パーソナリティ・テスト・アプローチ」、10章「精神医学的アプローチ」、11章「生理学的-形態学的アプローチ」、12章「社会学的アプローチ」、13章「行動研究の方法論」からなる。ドロシーのLSEでの学位論文の前半4分の1弱は先行する経済理論の要約と検討で(Thomas, 1925, pp.21-77)、最後にオグバーンと自身のアプローチを紹介しているが、類似の既存アプローチの検討が行われ、巻末の第12～13章が著者らの立場の集中的な紹介となっている。

以上のように、『アメリカの子供』の第2部と第3部は、『不適応の少女』の第5章と第6章を発展させた内容をもち、これらの記述に対してドロシーの貢献があったと想定される。ただし、本書では分担執筆の箇所が明示されないため、具体的な執筆分担の詳細は分からない。また本書でもW・Iの他の著書と同様、大量の先行研究からの報告やデータを本文中の随所に取り込んで議論が進められる。仮に本書全体をそのままコーパス化しても、あまりにも著者2名以外の文章量が多いテキスト・データとなり、そのままで語の使用や共起などを計測しても、著者2名の文体比較にならない。また、両トーマスともそれほど特徴的な文体ではなく、多くの引用元と共通する「報告書向け文体」にみえる。以上から、本書の執筆分担の実態を検証する作業は今後の課題だろう⁹⁾。

本書の結論部に相当する第12～13章について、特徴的な部分を要約する。

第12章は「社会学的アプローチ」と題され、その目的は「他の個人と社会との関連で決定される個人行動についての社会的なものだと

主張される (*Ibid.*, p.506)。ただし、本章の3分の1ほどは心理学や精神医学の研究結果の紹介であり、J・B・ワトソンらの心理学、ハリー・スタック・サリヴァンらの精神医学などの各種の作業と結果が検討される。著者の目的で良好な社会学的材料は、社会学者ではなく、心理学者、教育心理学者、精神医学者が準備している、と述べている (pp.506-507)。続いて本章のやはり3分の1程度を占めるのが、パーク、バージェス、クリフォード・R・ショウ、フレデリック・M・スラッシャーといったシカゴの社会学者たちの犯罪や逸脱研究の検討である。もうひとつ大きく扱われているのが、すでにティーチャーズ・カレッジで開始されていたドロシーを中心とする児童の行動測定の研究 (「実験社会学」と呼ばれた。後述) である。

両トーマスにとっての社会的アプローチとは、状況それも客観的および主観的要因からなる「全体状況」(p.572)の内部で生じる個人の社会行動の研究、ということだった。「全体状況は多少とも主観的な要因を含み、行動上の反応は、ただ全体の文脈との関連でのみ研究しうる」。この主題に忠実であろうとしたため、彼らのいう社会学とは非常に具体的な状況と行動の詳細をそのまま重視するものとなり、現在一般に理解されるよりも広範な領域を含み、心理学者ジャン・ピアジェの子供の言語獲得研究なども検討されている。ドロシーの参加で対象となる研究の幅が広がった印象があり、統計的な調査結果が前著に比較して大量に提示されているが、まだ明瞭に彼らに独自の社会統計的な調査結果は報告されていない。

第13章は彼らの方法認識を要約的に示し、「行動的または状況的アプローチは、本能や本性を最小化して、多様な状況下での行動反応と習慣形成を、比較によって扱う」とする。この章には「4つの願望」も「価値と態度」の議論もほぼ出現しない (ここからW・Iが「状況」アプローチをより重視したともいえる)。

ただし、以前からW・Iが別著者の統計データを利用したのは既述の通りだが、「状況的アプローチは、統計手法と生活記録を利用して、原因が不明瞭な多くの問題に光をあてることができる」(p.573)と述べ、より明瞭な形で統計手法の重視が明言される。「必要なのは、利用可能な統計研究とともに、若い非行者のケース・ヒストリーとライフ・ヒストリーを継続的かつ詳細に検討することであり、それが引き出される推

論の基礎となる。これらの推論は、今度はたえざる統計的分析にかけられるべきであり、より多くの要因が数量的な形式へ変更できるようになる」(p.571)という記述には、明らかにドロシーの指向性が表明されている。すなわち、W・I単独の『不適應の少女』では、主として質的な「状況」の検討によって議論が展開されていたが、ドロシーが参加した本書では、その「状況アプローチ」という手法自体に統計的手法が含まれるものとされ、質的な「状況」分析の結果をいっそう数量的な形式へ変更していく方向性が打ち出されている。この部分が前著からの大きな変化といえるだろう。

章末、「行動形成的な多様な状況についての我々の研究の進展により、さらに曖昧な大衆行動の形成——共通の感情と行為への、全人口の参加という問題にもアプローチできることを希望する」と記され、これは事実上、状況アプローチのマスメディアへの適用の可能性である。「それは、衣装の流行、群集行為、戦争ヒステリー、ギャング、マフィア、沈黙の掟、ファシズム、あれこれの煙草や歯磨きの人気、政治家の一瞬の人気と汚名などである。この全体状況を十分に定義はできないが、それは、言語・身振り・ゴシップ・印刷物・シンボル・スローガン・プロバガンダ・模倣の相互作用を含み、何よりも、コミュニティーと国民性と人種の明瞭な性格形成を生み出す過程に見える。この過程自体が、そこで行動規範が確立される一連の状況の定義として記述できるだろう」とする(p.575)。サンプリングと質問紙調査に代表される機能主義のメディア研究とは別タイプの実証的なマスメディア研究の方向性が提出されている。

3 子供の行動の観察計画

ドロシーのあまり注目されていない研究に、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ時代(1927-1930)からイエール大学人間関係研究所時代(1930-39)に、多くの女性協力者と実施した子供の行動発達の研究プロジェクトがある。この時期を時系列的な詳細で示すと、W・Iの『不適應の少女』が刊行され(1923)、ドロシーが学位論文を完成し(1924)それが刊行され(1925)、ドロシーが「非行の経済要因」調査計画の基金を得(1925末, Thomas, 1952, p.664)、ドロシーがW・Iと会っ

て共同を開始し（1926）、ドロシーがティーチャーズ・カレッジに奉職し（1927）、両トーマスの『アメリカの子供』が刊行され（1928）、ドロシーと協力者の『人間行動研究の新技法』がティーチャーズ・カレッジ出版部から刊行され（1929）、イエールへ異動し（1930）、『社会行動の観察研究』がイエール大学出版局から刊行される（1933）、となる。

ドロシーと協力者による2著には興味深い特徴がある。ドロシー自らがここで試行されたアプローチを「実験社会学 experimental sociology」と呼んだこと、それがW・Iとの共同からの展開であることなどである。

3-1 実験社会学の基本的な枠組み

「児童発達モノグラフ」の1巻として刊行された『人間行動研究の新技法』(Thomas and Associates, 1929) は、「ティーチャーズ・カレッジの教育学助教授」の「ドロシー・スウェイン・トーマスと協力者たち」名義の著作であり、ドロシーの総論「実験社会学の方法論」および9本の個別調査論文からなる。

一般に、『景気循環の社会的諸側面』(Thomas, 1925) によって経済学のPh.D.を取得した人間が、4年後に児童の発達と行動観察のモノグラフを準備するのは、ありがちな研究経歴ではない。ただし「社会的諸側面」でドロシーが含意したのは、人間行動の諸局面だった。学位論文の後半3分の2は、婚姻・出生・死亡・貧困・アルコール中毒・犯罪・移民と「景気循環」の関連の、統計的な検討である。同書の冒頭に、「本研究の目的は、景気循環の社会学的な諸側面を検討することである。そのツールは統計分析である。結果は数量的に表現され、解釈は数量的分析の急場に限られる。一般的な問題は、社会活動のどの領域において景気循環の影響が現れるかであり、考察された各領域におけるこの影響の相対的な程度を測定することである」(Ibid., p.vii) とある。

このように、ドロシーにとって経済は、人間行動を決定する重要な要因として意味があった。一般的な人間行動の数量的研究こそがドロシー・トーマス年来の課題だった。ならば、この問題関心をもつ研究者が、マクロな景気循環の社会活動への影響を検討した数年後に、ミクロで客観的な児童の行動観察手法のモノグラフを刊行することも、理解されうる方向性だろう。

共同開始以前から子供の行動発達問題を研究していたW・Iからドロ

シーへ、この方向への示唆があったかは不明である。ただしドロシーは、1925年に「非行の経済要因」調査計画を(W・Iに会う前から)開始している。ドロシーは当初、学位論文と同様、景気循環と非行の関連を想定し、「現実的な疑問や手続きを定式化するために何が本質的な行動研究かは十分に知らなかった」(Thomas, 1952, p.664)のためにW・Iに接触する。他方W・Iは、ロックフェラー財団から行動の研究と制御に向けた各種の視点と調査手段の評定(『アメリカの子供』第2～3部になる報告)を求められ、統計助手の採用を助言されていた。問題関心としては以前からあったドロシーの指向性が、W・Iとの共同の中で、具体的な社会認識と方法認識を(ただしW・Iと対照的に客観的な数量データを重視する調査計画の方向を)持ち始めたものと推測される。

「実験社会学の方法論」冒頭には、「本書で準備的な形で提出される研究は、社会行動への実験的アプローチである。この理由から我々は、依拠した方法論図式を実験社会学と呼ぶ。それが社会的であるのは、社会的相互作用の場での多様な状況における外部行動の研究を目的とするという意味においてである。それが実験的であるのは、行動と状況の両者について科学的な記録が得られるように、かつ、統計分析——行動—状況関係の評価のための最終的な必要ツール——が結果的に適用できるように、観察者を制御する技法を開発するという意味においてである」とある(Thomas, *op.cit.*, p.1)。また、この引用への註に「社会学のこの概念は、ウィリアム・I・トーマスとドロシー・スウェイン・トーマスが『アメリカの子供』(ニューヨーク、1928、第12章)で展開した」とある。ここから、本論および本書は『アメリカの子供』計画、とりわけその第12章以降からの展開である。共著者としての関与ではないが、この研究計画それ自身が、W・Iの「質的な事例の状況分析」という先行研究を、さらに数量的かつシステムティックに展開させたものだろう(反対にW・Iも、ドロシーから自分への社会統計手法の影響を認めていた)。その意味で、本書はシカゴ社会学の展開形態であろう。ドロシーの他の多くの研究計画と同様、本書のそれも、W・Iを含む多数の関係者から影響されている¹⁰⁾。

3-2 実験社会学の具体的な手法

ドロシーは、「実験社会学の方法論」中で、当該書中の個別論文を紹

介しつつ自らの方法論を提出している。それを要約すれば、この領域では純正の客観データを得る試みは少ししかなく、それは測定できないものを測定しようとする試みだ、という感情もある。形而上的関心ではなく既存資料の検討により、何が検討を要する重要事項かを決定し、測定単位を發明し、測定装置（つまり観察者）を制御する手段を開発しようとした。複雑な演繹的な方法論体系が展開された実例もあるが、この種の方法的考察からは、行動に関する純正の知識はほとんど得られない。他方で実証主義者にも問題があり、行動「問題」の扱いは、科学的というより技巧的 artistic なアプローチとなり、成功率は相対的に低い。事例資料から生じた仮説を、科学的方法で検証することが必要であり、既存の行動資料に統計手法を適用することにつながった。

利用できるデータは、主として記述的な説明つまりケース・ヒストリーと日記の記録であり、非常に啓発的だが、科学的分析の資料としては難しい。ここでのデータはせいぜい特定の検証可能な事実を扱ったという意味でのみ客観的なだけで、選択的で首尾一貫せず、他の記録と比較できない。これは、社会行動という行為と、異なる時点でのそれら複雑な行為の様々な要素の記録とが、著しく複雑なためである。最悪の場合、それらの記録は、科学的視点からは全く無価値な事実と解釈の混合物となる。最高の場合でも、選択と強調点は多少とも記録者に依存する。データは、予測可能な小さな誤差範囲内で、観察者から独立でなければならない (Thomas et. al., *op. cit.*, pp.1-3)。

以上のようにドロシーは、W・Iと『アメリカの子供』の社会認識は継承しつつ、「科学的というより技巧的」な手法に疑義を提起し（これがW・Iの「状況」分析の手法かは明記されない）、人間行動のより客観的なデータを得ようとする。その適切な重要事項の選定、分析単位の確定、彼女にとっての「測定装置」である観察者の管理が必須だとする。『アメリカの子供』第12章で萌芽的に示されたドロシーの指向性が本書で具体化している。彼女が指向したのは、いわば行動計測版『不適応の少女』の方向だろう。「測定できないものを測定すること」への野心と懸念は、ドロシーの研究生活に一貫してみられる。

続いて本書の調査計画が示される。心理学で使用される準備された刺激という意味での「統制」されたものではなく、「純正の社会環境の内部での社会行動」にアプローチすることが、探求される主題の本質から

必要だ、とドロシーはいう。「換言すれば、我々は、特定時点で特定個人が外的に行爲し返す統制されない環境内部の特定の刺激を記録する手段を発見したい——一定の時間にわたり、彼の選択的な反応にはどんな一貫性が観察可能であり、異なる個人間には、どんな変動が示されるのか」(Ibid., p.5)。この方向を、観察者をあまり意識せず、行動がいつそう単純で、成人行動へ発達していく児童に適用する。

W・Iの指向性を継承して、ドロシーは「自然な社会環境の総体(全体状況)」内の人間行動の客観的な数量化を意図する。「個人内部の状況の定義の理解」を重視したW・Iと相補的に、ドロシーは「外部的で周囲に働きかける社会行動」を研究対象とする(状況的だが行動的な方法)。そして自然な社会環境内の児童の外部行動の全てを記録しようとした。繊細とも大胆とも蛮勇ともいえるこのアプローチ法が、ドロシー・トーマスを「シカゴ学派の社会認識にルーツを持った、強固な数量化指向の社会学者」という独特なスタンスに置く¹¹⁾。

具体的な研究手法は、ティーチャーズ・カレッジ児童発達研究所に隣接する保育園で、園児を18～32月齢グループと33～48月齢グループに分け、午前9～午後3時まで週5日滞在する彼らの行動を、各種の設備や玩具が置かれた遊び部屋での午前2時間の、活動の自発性が高い時期に、複数の観察者によってシステマティックに記録する。作業の詳細は各章の分担者で異なるが、たとえばある子供の「動線」が、他者から他者へ、あるモノから別のモノへと移動する経過を追って、部屋の床面図上に記入されたりする。4人の観察者が2人ずつの2ペアで記録する状況では、16人の子供について、約20回の各5分間の観察が行われ、全体では324回の観察記録相互の信頼性が、統計的に検証されている。観察者はストップウォッチを持ち、各活動に使われた時間、人やモノとの接触の回数、活動総量(移動距離)を記録する。複数の観察相互の信頼性をピアソン相関係数により検定する。基本的に、児童の外部行動は、「他者を含む(社会的側面)」「モノを含む(物質的側面)」「自己を含む」の3カテゴリーに分類されて記録される。発言については速記の記録も利用される。

以上は本書で報告された観察研究のごく一部の要約にすぎない。成功事例も失敗時の問題も報告されている。作業の基本は、前述の幼児の2グループについて、自発性が高く観察者を意識しない遊び部屋での時間

に、とりわけ「人」「モノ」「自分」に対してどのように外面的に行動したかを、複数の標準的な指示を与えられた観察者が、時間を計測しつつ自記式にて各種記録し、その結果を、信頼性を含めて統計的に検討することである。ドロシーの信頼性の基準はある程度厳しく、複数の記録の一致がピアソン係数で .92 から .98 であればさすがに「非常に高い」と評価するが、.47 から .80 であれば低い low 信頼性だとしている (*Ibid.*, pp.8-9)。なかなか結果の出にくい判定基準だといえよう。

実験社会学の手法は概略以上である。ドロシーにとって「全体状況」(*Ibid.*, p.20) と外部行動を正確に記録する標準化された観察者＝測定装置の訓練が、実験社会学の要諦だったようだ。彼女の方法認識の他の部分は、W・Iの枠組みにある程度依拠しつつ、より適切な検証方法を導出しようとしたかに見える。それは次の『社会行動の観察研究』でさらに展開されるが、別稿に譲る。これらの研究は、ドロシー本人が認めていたように「準備的な preliminary」調査計画のための作業であり、なんらかの確定した結論を導くものではなかった。

以上のように、W・Iの研究計画との関連でドロシー・トーマスの実験社会学の枠組みと方法を眺めれば、それが、『アメリカの子供』の基本的な問題関心と方法視座を継承しつつ、『不適応の少女』などでなされた実証報告をさらに科学的・社会統計的・客観主義的に検証・展開しようとしたシカゴ社会学の発展的展開なのは明らかだろう（オグバーンとW・I双方の影響ともいえる）。これらの課題は、彼女がここで指摘した社会行動の科学的検証の問題を含めて、台頭してきた次世代のハーヴァード＝コロンビア系の機能主義社会学によって（別の革袋の中で）再度検討される。具体的には、ロバート・F・ベールズによる小集団での相互作用過程の詳細な測定であり、これがタルコット・パーソンズを中心とする「行為の一般理論」研究計画の1つの基礎を提供した。

このようなドロシーの調査計画は、その全包括的なデータ収集への指向性ゆえにか「真空掃除機的」と評されている。全体状況と、その内部の全ての外部行動を記録し、相互関係や異同を検討しようとする野心的な調査計画である。

ドロシーは30年代後半からスウェーデンの人口動態などの実証研究に従事し、以後は実験社会学としての展開はみられない。その後40年代に、ドロシー・トーマスの調査計画は、再び国内の大きな社会変動の

研究に向けられる。UC バークレーを中心に実施された、戦時下における日系アメリカ人の強制収容と移住の大規模な実態調査である¹²⁾。

4 日系アメリカ人の研究

ドロシーが主導したこの調査計画は、2冊の共著『損傷 *The Spoilage*』(全408頁)と『救出 *The Salvage*』(全649頁)に加え、関係者の業績も数冊刊行された。この計画を「日系アメリカ人の研究」と呼び「強制収容と移住の研究」と書かないのは、ドロシーが本研究を『ポーランド農民』と同様の(米国内で強制された国内「移民」の)日系アメリカ人の文化変容の研究と考えていたからである。この意味で、日系人の強制収容と移住は、W・Iとドロシーの年来の研究課題を検証する突発事例、その目的での「社会実験室」とされた。

当初、ドロシーの研究計画は、5つの研究領域(社会学、社会人類学、政治学、社会心理学、経済学)にわたる学際研究として想定され、それぞれの領域からの問題も提出された(Thomas and Nishimoto, 1946, p. v)。だが研究者が戦時動員されるなどしたため、実際には規模を縮小して実施された。1941年に、アメリカには12万7000人ほどの日系人が存在した。もっとも集中していたのがカリフォルニア州の9万4000人ほどだが、少数派の地位だった。これらの日系アメリカ人が、敵国のスパイ懸念など各種の理由から強制的に収容され、複数箇所への再定住施設に移動し集住することを要求された。再定住施設のうち、北カリフォルニアのトゥールレイク、アリゾナのポストン、アイダホのミニドカが選定され、これらの収容施設において、各種の収容政策が適用された人々における行動と態度の変容と、社会的な適応と相互作用のパターンが記録分析された。「インサイダー」による記録が必須なため、強制移住に巻き込まれた日系人から訓練された観察者が日々の記録をつけた。最大で1時期に12人の日系アメリカ人がキャンプで使われた。3名の白人メンバーも長期間キャンプに滞在した。各観察者は情報提供者のサークルを形成し、その信頼を得て、観察されていると知らない人々の行為と会話を詳細に記録報告した。観察者の同胞の避難者にとって「調査」と「尋問」は同義であり、「情報提供者」と「密告者」の区別は認められなかった。そのため観察者は、「イヌ inu」としてスティグマ化される危

険の中で調査した。日系人のスラングが随所で採録されている。

充分な観察上の統制ができない中、たえず記録と解釈の歪曲化の危険がある2つの言語と文化が混在した状況内で観察が実施され、結果がいくつかの主題ごとに詳細に報告される。第1巻は日系人がアメリカへの「不忠者」としてスティグマ化、立ち退き、抑留される「損傷」を扱い、第2巻は、彼らの地位が、分散化と再定住によって一時的に改善される「救出」を扱う (*Ibid.*, pp.xii-xiii)。

以上ドロシーの2著作は、完成度について複雑な評価を得ている。ひとつには、このドロシーの調査計画には、実査にあたっての具体的な理論的指針の不足が関係者から指摘されていた。「どの出来事をどのように記録するか」の明瞭なガイドラインがやや不足していた。そのため、これらの著作で提示されるのは、大量の現地データが中心であり、それに見合うだけの分析が不足だとの評価があった。実験社会学で試行された理想的な観察法を、人種問題の最前線にも持ち込むかのようなその「真空掃除機的」な調査計画は、予想される困難を現実のものにした。移住先での参与観察者(彼女にとっての「測定装置」)の管理と統制は難しく、大量のデータばかりが集積されていく傾向があった。強制収容の当事者でもある日系人フィールドワーカーには、ドロシーの距離を置いた科学的な方法が不満だったとも言われる。日系人側から事後的に、この調査方法への各種の評価と批判が寄せられている。意欲的で、社会的ニーズにも即応していたが、多くの課題も残した調査計画だった。

とはいえ以下の指摘もある。「彼女はできるかぎり、あらゆる物事を数量化した。だが、日系人の経験を詳細に記述した彼女の2著作『損傷』と『救出』には、W・I・トーマスおよび彼の動機と個人反応への関心が、明らかに認められる。これらは抑制の効いた著作であり、繰り返される暴挙の扱いは、ほとんど冷淡なほどである。科学者として彼女は、細部まで正確な説明を展開しようとして、自分が感じた共感や感情が強く介入することを拒否したからだ」。そして後に「最高裁が、我々の仲間の市民〔日系アメリカ人〕に対する我々自身の犯罪の、先入観のない証拠として彼女の著作を採用したとき、彼女の正しさは立証された」(*Lee, op. cit.*)。弔辞は肯定的な評価を語るものだが、この指摘が妥当ならば、日系アメリカ人 *Americans of Japanese Ancestry* の弁護士としてのドロシー・トーマスの貢献が検討されてもいいだろう¹³⁾。

ドロシーの鍵概念を「調査計画」としたのは、研究を特徴づける用語があまりなく、以上のような各種「調査計画」が彼女の研究の特徴だと考えられたからである。その問題関心と調査計画はいまなお触発的だろう¹⁴⁾。シカゴ系の社会調査といっても排他的に質的ではなく、体系的な調査計画も多い。

ドロシーの調査計画は、1942年に彼女に提出された日系人に関する学部生のターム・ペーパーを基礎にしていた。その学生は、強制収容と移住の調査でも重要な役割を果たしていたが、ドロシーの調査方針に同意できず調査チームを離れ、『救出』に数回の言及があるが、著書の共同者として明記されていない。そのパークレーの日系二世の学部生は、タモツ・シブタニという名前だった。

小論では、ドロシー・S・トーマスの社会学領域での代表的な3種類の業績を、特に「調査計画」を中心に、背景の文脈や状況とともに紹介し検討した。

註

- 1) イェール時代のある協力者は、当時のドロシー・トーマスを、「ショートの前髪、長いホルダーのシガレット、そしてテーラードの服に身を包んだ「フラッパーのステレオタイプ」に似ており、活発に会話し、感染性の大量の熱意を自分の調査にもっていた」と覚えている (Roscoe, 1991, p. 402)。小論でのドロシー・トーマスの伝記的事実は、多くをジャニス・ロスコー (Roscoe, *op. cit.*) に負っている。他に本人のアメリカ社会学会会長就任演説 (Thomas, 1952)、アメリカ社会学会ニュースレター掲載の死亡記事 (Lee, 1977) 等も参照した (これらは出生年などに多少の不整合があるが、そのまま掲載)。ドロシーの多岐にわたる大量の業績を1論文で検討することは不可能であり、小論は研究の全体的な文脈と傾向を伝えることを意図している。
- 2) W・Iの主要な共著者にシカゴ学派と通例みなされる人はいない (共同者や弟子にはいる)。W・Iが社会学者として教えた大学は、シカゴ大学 (1894-1918)、ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ (1923-1928)、ハーヴァード大学 (1936-1937)、カリフォルニア大学パークレー校 (1940-1947) である。前3者は (終身身分でないものを含むが) 公的な地位で、後1者は引退後のやや非公式なものらしい。

なおドロシーは、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ助教授および調査助手 (1927-1930)、イェール大学人間関係研究所調査助手 (1930-35)、同社会統計調査ディレクター (1935-1939)、終身身分でUCパーク

レーの講師（1940）から農村社会学の教授（1941-1948）、ペンシルヴェニア大学ウォートン校社会学教授（同校最初の女性教授、1948-1970）を務め、他にFRB（1924-）、ストックホルム大学社会科学研究所客員（1933, 1935, 1936）、カーネギー財団アメリカ黒人研究スタッフ（1939-1954）などで働いている（Roscoe, *op. cit.* 等）。W・I自身の著作は1937年の『原初の行動』が最後（コメント類除く）だが、ドロシーの1946年（W・I死去の前年）の著作『損傷』まで、原稿準備段階で助言と指摘を受けたなどのW・Iへの謝辞が記載されている。

- 3) トーマスとパークの関係は別稿を要するが、以下の基本事実は必要だろう。パークの弟子エヴァレット・C・ヒューズの回想（1964）に以下の素描がある（Hughes, 1971に再録）。パークは「バプティスト教会の一部であるコンゴ改革委員会に、秘書つまり宣伝マンとして関係した。……この過程で彼は……約7年間、この世代の指導的黒人アメリカ人、ブッカー・T・ワシントン Booker T. Washington の広報マンをした。……7年間彼のゴーストライターを務めたあと、パークは会議を開いて、ウィリアム・I・トーマスを招いた。……1911か1912年のいつかに……トーマスは、アラバマ州のタスキーギ学校で開催された人種関係の会議に招かれた。……トーマスは数日滞在する予定だった。……彼はそこに2週間滞在した。……それまで一度も耳にしたことがなかったパークと彼は、いっしょに赤粘土の道を歩いて回った。……1914年、50歳のパークは、ほとんど無給で、どんな場合にも再雇用なしの合意のもと、専門的な講師 *professorial lecturer* としてシカゴ大学へ行った。彼はそこにとどまり、その学部の、そしてしばらくはアメリカ社会学の、中心人物になった」（Hughes, *op. cit.*, pp.543-546. 要約編集して一部引用）。

トーマスの残存する数少ない個人的な文章によれば、「1910年頃、私はブッカー・ワシントンから一通の手紙を受け取った……。ワシントン氏は、21か国の黒人が参加する会議に私を招待すると書いてきた。彼はさらに……それまでに私が書いたものを全部読んでいる事実を明らかにし、批判と評価をも示した。結局、私はタスキーギの会議に出席し、この手紙がワシントン氏の書いたものではまるでなく、ロバート・E・パークなる白人が書いたものだと知った……。パークはいつも沈思しているだけでなく、自分の沈思を私にも課した。それは最終的に、私自身にとって非常に利得になった」（Baker, 1973, p.249）。パークに言わせると、「私はトーマスに、ほとんど初めて、自分自身と同じ言葉を話す人物を見出した。それで彼が、シカゴに来て黒人について授業をするように私を招いた時、私は大いに喜んでそれをした」（Baker, *op. cit.*, p.259）。そして「パークがトーマスに加わると、この国のどの社会学者よりも黒人と白人アメリカ人の関係を知っていた人間と、ヨーロッパの農村からの移民と制度に何が起きたかを

理解するために最高のことをした人間とが会った」(Hughes, *op. cit.*, p.546)。パークは、トーマスの仕事がシカゴの調査の伝統を確立したと記している (Volkart (Editor's note) in Thomas, 1951, p.85)。

- 4) トーマスの著書の冒頭部に、「まえがき」の筆者や「献辞」の対象として、Dummer という名前が出てくる。整理すると、イーセル・スタージェス・ダマー (Ethel Sturges Dummer, born Ethel Sturges, 1866-1954) は、アメリカの社会福祉指導者・慈善家・著者である。1888年に、著名なシカゴの銀行家で、やはり地元の社会福祉と保全組織において活動的だったウィリアム・フランシス・ダマー (William Francis Dummer, 1851-1928) と結婚した。ダマー夫人は、シカゴ市の多くの社会福祉活動に関与した社会活動家で、20世紀初頭のアメリカの心理学と社会学への支援でも知られ、ハーヴァード大学ラドクリフ高等研究所に書簡類が保管されている (以上の記述は当該書簡集の説明文 “Papers of Ethel Sturges Dummer, 1689-1962” などから要約)。以上から、トーマスの論文を含む講演論集『教育に関する現代科学の示唆』(1917)の「まえがき」署名にある「E.S.D.」は、イーセル・スタージェス・ダマーである。『不適応の少女』では、扉ページおよび「目次」に「FORWARD BY Mrs. W. F. Dummer」と古い表現での記載があり、「まえがき」本文の末尾に明示的に「ETHEL S. DUMMER」の署名がある。『アメリカの子供』冒頭にも「TO MRS. W. F. DUMMER」との献辞がある。すべてダマー夫人だろう。
- 5) 手続きとしては、(1) 原著初版 (の複製版) の全ページをスキャナーにて jpeg 画像化し、(2) 必要な画像修正作業とともに、事例や長い引用の部分を画像から消去して、(3) 文字認識ソフトにてテキスト・データ化し、(4) 数回の誤認識チェックを行った。ほぼ正確なテキスト・データ化が行えたが、多少の誤認識は残存している可能性がある状態で分析に使用した。トーマス自身の文章だけを残すようにしたが、長めの引用 (2頁程度) であっても、本文の行論に必須と判断された部分は残した (文体研究のためには削除すべき部分だろう)。
- 6) この部分からも明らかなように、W・Iの鍵概念の1つである「4つの願望 four wishes」は、個別には、「～への欲望 desire for …」という形式で示される。「4つの願望」のうち「新経験への欲望」とは新奇な経験や冒険を求める欲望であり、これに対立するのが安全と安定状態を求める「安全への欲望」である。親がもつ子供への愛情など「働きかけること」で代表されるのが「反応への欲望」(当初は「把握への欲望」)であり、逆に世間から認知され評判などを得たいと望むのが「認知への欲望」である。個人の行動やその同調的・逸脱的な傾向は、これら4つの願望が複合的に作用した結果として発現する。移民は、新大陸を見ようとして (新経験)、財産を作り (安全)、より高い地位を持って (認知)、配偶者を得ようとする

る（反応）、などと例示される。

パークとバージェスの『社会学の科学への入門』（Park and Burgess, 1921）中の研究例として、W・Iの「4つの願望」が採録されている（第7章「社会諸力」のII「資料」のC-3「人とその願望」。*Ibid.*, pp.488-491。但し筆者の所有は1923年8月刊の第4刷）。そこに再録された文章は「第一次集団規範」論文の「再陳述版 a restatement」である、との出典注記がある（*Ibid.*, p.488, n.1）。そしてこの『入門』版では、「4つの願望」は、現在一般に知られる「新経験」「安全」「認知」「反応」の欲望という形式に整えられている。事件の影響から元同僚のパークとミラー名義で刊行された『移植された旧世界の国民性』（1921）においても、『入門』に採録の部分と同じ語句での「4つの願望」の定式化がみられる（Park and Miller, 1921, Chapt.2, pp.27-29）。以上から、1917年刊行の「第一次集団規範」論文から4年以内に、W・Iのこの概念が改訂され現在通用する形になったと推定される。

さらに1918年の『ポーランド農民』の「方法論ノート」（但し筆者は現状で1958版を使用）では、まだ1917論文と同様の用語法（「新経験」「認知」「把握」「安全」）が、この順番で1回紹介されている（Thomas and Znaniecki, 1958, p.73）。従ってこの概念の定型表現は、さらに狭い1919～1921年の期間に起きたとも推定できる（初版での検討が必要）。これはW・Iを巻き込んだ事件の直後の期間で、W・Iはまだ次の職場ニュー・スクールに雇用されていない。

なお1917刊の講演論文の実際の執筆は、1916年3月以前である。当該講演会が1916年2～3月に実施されたとのダマー夫人の記録があり、原稿執筆はそれ以前と推定できるからだ（当時、1917年論文の題は「ペリシテ人、ボヘミア人、そして創造的な人」であり、W・Iの講演は4名中最後だった。E. S. Dummer Collection, cited in Lichtman, 2009, p.40）。すなわちW・Iによる「状況の定義」などの概念の使用開始は1916年3月時点まで遡及でき、1914年に渡米以後のズナニエツキがこれらの概念の当初の定式化に影響しえた期間は、1914～1916年3月までの最大2年前後となる（講演原稿の大幅な改定がなければ）。

もはやこの文献学的な詳細検討のレベルでは、重要な概念の起源の特定化のためだけにすら、論文や書籍の刊行年のみならず、刊行の月日や準備の年月日なども必要に思える。

- 7) ここに要約した社会の流動性や変動に関するW・Iの現状認識は、いわば「機能主義社会学の覇権以前の機能主義批判」であり、社会構造の安定性をしばしば前提とする機能主義社会学のスタンスへの事前の批判とも読める。シカゴ社会学とそれ以後のハーヴァードやコロロンビアの機能主義社会学は、両者の根本的な社会認識や前提する社会像で異なり、結果、別の方

法認識を導いたが、研究主題には共通するものも多い。

- 8) ときおり看過ないし誤解されるが、W・Iはそもそも、「参加者の眼前で流動するミクロな各種の社会配置」という意味での「状況」を分析対象として重視したのではない。これは、ドロシーの提案で編集された1951年のW・Iの根本的な立場を要約した著作からも明らかだろう（『成城文藝』242号掲載の拙論に記載あり）。彼の用語法での「状況」とは、目前のミクロな変化する個別「状況」につきず、むしろ「環境」や「生世界」的な含意のある「ひとがそこへ生まれ込む場所」、つまり有機体としての個人の周囲の自然的・社会的・制度的・集団的な現実、すなわち物理的世界と社会的世界の総体の謂である。situationは元来「場所 place」の意味合いがある語である。この誤解への対応で「全体状況」概念が導入されたのかもしれない。
- 9) 「完全なる論文には「脚注」は要されず、完全に独創的なる論文には「引用」すら存在しない」（後藤、「本論における「注」の役割について」、1982、p.384、圈点略）。とはいえ、学術的な正統性を明示するためには先行研究からの明示的引用が必要であり、実証データを本文中に引照することも実証研究では必須となる。それらが註の形式で表示されることも多い。
- 10) 同論の冒頭部に『アメリカの子供』と並んで引用されているのは、英国の統計学者・経済学者アーサー・L・パウレー Arthur L. Bowley の『社会現象測定の性質と目的』（2nd Ed., 1923）であり、パウレーはLSEにおけるドロシーの教師で、ミッチェル、オグバーンと併記して彼女の学位論文の謝辞に名前が挙げられた重要な影響力だった。
- 11) 社会状況内の諸個人の相互作用を全て計測する指向性は、ロバート・F・ベールズの『相互作用過程分析』（Bales, 1950）とも通底する「全体測定」的な発想であろう。ベールズの同書は本書を文献目録に挙げている。国内での少数のベールズ的な調査例は、加藤秀俊「ある家族のコミュニケーション生活」（『思想』392号、1957年）だという（竹内郁郎教授からのご教示による。1987年）。
- 12) ドロシー・トーマスは1940年代当時、UCバークレーに新設計画があった社会学部の学部長に就任する一定の可能性があった（Roscoe, *op. cit.*）。新設は遅れ、戦後1952年にはハーバート・ブルーマーがその学部長になった。
- 13) 小論の主たる執筆動機がこの指摘だった。筆者はたまたまこの研究領域に従事したにすぎないが、社会科学へのネット上での批判的な書き込みを目にするたびに、ドロシー・トーマスの実例を想起する。これは社会科学の社会的有効性の具体例ではないだろうか。なお、著者の履歴や経歴を著作内容と合わせて検討する手法は学説史ではままたま見られる。国内では西部邁『経済倫理学序説』（1983）中のヴェブレン論などの実例がある。

- 14) 個人としてのドロシーは、「気分屋で気まぐれで、猛烈な働き者だった。自分自身を「ひどいグズ」で、始めたことを台無しにして決して完成させないと思っていた。彼女は親切だったり怒りっぽかったりして、いつでも予測不能だった」(Lee, *op. cit.*)。その野心的な課題から、これは無理ないことに思える。

参考文献

- Baker, P. J., "The Life Histories of W. I. Thomas and Robert E. Park," *American Journal of Sociology*, 1973, Vol.79: 243-260.
- Bales, R. F., *Interaction Process Analysis: A Method for the Study of Small Groups*, Addison-Wesley, 1950.
- 後藤将之、「George H. Meadのコミュニケーション論について」、修士号請求論文、東京大学大学院社会学研究科、1982.
- Hughes, E. C., "Robert E. Park," *New Society*, Dec 31, 1964, in *The Sociological Eye*, pp.543-549, Transaction, 1984, (original, Aldine, 1971).
- Lee, E. S., "Dorothy Swaine Thomas (1900-1977)," (An Obituary), *Footnotes*, American Sociological Association, 1977, Vol.5, No.6, p.12.
- Lichtman, E. M., *Ethel Sturges Dummer: A Pioneer of American Social Activism*, iUniverse, 2009.
- Parenti, M., "Introduction to the Torchbook Edition," in Thomas, W. I., 1967, pp.viii-xxii.
- Park, R. E. and Burgess, E. W., *Introduction to the Science of Sociology*, 1921.
- Park, R. E. and Miller, H. A., *Old World Traits Transplanted*, Harper, 1921, (actually a W. I. Thomas' book published under his fellows' names).
- Roscoe, J., "Dorothy Swaine Thomas," in Deegan, M. J. (Ed.), *Women in Sociology: A Bio-Bibliographical Sourcebook*, Greenwood Press, 1991, pp.400-408.
- Thomas, D. S., *Social Aspects of the Business Cycle*, Routledge, 1925.
- Thomas, D. S., *Social and Economic Aspects of Swedish Population Movements, 1750-1933*, MacMillan, 1941.
- Thomas, D. S., "Experiences in Interdisciplinary Research," *American Sociological Review*, 1952, Vol.17: 663-669.
- Thomas, D. S., and Associates, *Some New Techniques for Studying Human Behavior*, Teachers College, Columbia Univ., 1929.
- Thomas, D. S., Loomis, A. M., and Arrington, R. E., with Isbell, E. C., *Observational Studies of Social Behavior, Vol.1: Social Behavior Patterns*, Institute of Human Relations, Yale Univ., 1933.
- Thomas, D. S., and Nishimoto, R. S., with Hankey, R. A., Sakoda, J. M., Grodzins,

- M., and Miyamoto, F., *The Spoilage: Japanese American Evacuation and Resettlement, Vol. 1*, Univ. California Press, 1946.
- Thomas, D. S., with Kikuchi, C., and Sakoda, J., *The Salvage: Japanese American Evacuation and Resettlement, Vol. 2*, Univ. California Press, 1952.
- Thomas, W. I., *The Unadjusted Girl: With Cases and Standpoint for Behavior Analysis*, Little, Brown & Co., 1923, (Harper Torchbooks, 1967).
- Thomas, W. I. and Thomas, D. S., *The Child in America: Behavior Problems and Programs*, Alfred A. Knopf, 1928.
- Thomas, W. I. and Znaniecki, F., *The Polish Peasants in Europe and America*, Dover, 1958, (Orig. 1918-1920).
- Thomas, W. I., *Social Behavior and Personality: Contributions of W. I. Thomas to Theory and Social Research*, Volkart, E. H. (Ed.), Social Science Research Council, 1951.